様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年３月２８日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">看護学科</td><td>職 名</td><td>助教</td><td>氏 名</td><td>滝川由香里</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">母親の胎児存在認識の促進可能性―助産所における妊婦の妊娠期ケア経験の語りを通して</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td>専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>滝川由香里</td><td colspan="2">保健福祉学部看護学科</td><td>母性・助産</td><td colspan="2">情報収集・分析</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>池田理恵</td><td colspan="2">保健福祉学部看護学科</td><td>母性・助産</td><td colspan="2">分析</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">【背景】
育児不安や乳幼児虐待といった問題が顕在化した現代において、母親準備期の妊婦に対する効果的で積極的なサポートが求められている。先行研究において、妊娠期における母親の胎児への愛着は妊娠期を通じて発達し、出産後の母親の我が子への密着傾向や肯定的な育児態度、母親の児への感受性、生後 1 年間の児への愛着に影響を及ぼすことが報告されている。
妊娠期は、助産師や医師等の医療専門職者が定期的に助言やサポートを行える貴重な期間である。しかし妊娠期における胎児愛着形成促進のためのケアは、個々の医療者の経験的なケアで対応している現状があり、より効果的なケア展開を行うため、母親の胎児への愛着形成に寄与する要因について明らかにする必要がある。

【目的】母親の胎児への愛着形成に寄与する要因として、妊娠期に受けるケア内容や妊婦が経験する事象について、助産所において開業助産師から妊娠期ケアを受けた女性の語りから明らかにし、胎児愛着形成促進ケア開発の基礎資料とすることである。

【研究方法】
1） 研究参加者：研究協力の承諾が得られた助産所で妊娠期ケアを受けて出産し、産後半年～1年半経過した女性2名。参加者の募集は、助産所を通じて行った。

2） 情報収集期間：平成29年1月～平成29年3月。
インタビュー方法：
時間的経過を把握することと研究参加者に妊娠期の概要を思い出してもらうことを目的に、現在までの産科歴、今回の妊娠期の経過を簡単に話してもらった後に、「妊娠中の赤ちゃんとの関わりについて、印象に残っていることはどのような事ですか？」という質問から始まる1回60分程度の非構成面接を、1人3回程度、助産所、参加者の自宅等、女性の希望する場所において、プライバシーが確保できる状態で実施した。面接内容は、本人の同意が得られた上で、ICレコーダーにて録音し、インタビュー時の様子を盛り込みながら逐語録を作成した。

3） 分析方法：経験の意味を探索的に検証するため、質的記述的に分析した。
具体的な方法は以下の手順で行った。
①逐語録を熟読し、全体の意味をとらえる。
②妊娠期の胎児に関する状況を取り上げる。
③経験の意味の単位を明らかにする。
④経験の意味を他の経験の意味の単位やあるいは全体の意味と関連付けて統合し、参加者の言葉を引用しながら記述する。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要	【結果・考察】 　研究参加者は2名（Aさん、Bさん）であり、どちらも経産婦（2人目経産婦、4人目経産婦）であった。Aさんは前回クリニックで健診・出産を経験しており、今回は前回とは異なるクリニックで健診を受けた後に6ヶ月頃から助産所にて妊娠期ケアを受けていた。Bさんは１人目から助産所にて妊娠期ケアを受け出産しており、今回はクリニックで健診を受けた後８ヶ月から助産所にて健診を受けていた。 　妊娠中の胎児との関わりは、これまでに受けた妊婦健診時の様子から主に語られた。 　胎児に「ちゃんと触って」「声をかけてくれる」「お腹をなでてくれる」という助産師の行動は、通常の医療の中では非日常的なことであると感じながら、それが行動によって示される場合に、「自分が大切だと思っている」胎児と自分が大切にされていると感じ、「感情的なものを持ち出しても受け止めてくれる」という安心感に繋がっていた。 　一方、違和感を抱いた場面は、「きちきちっと」進行する「流れ」の中で児の異常がないか確認され、「流されて」「終わる」状況であり、そこでは自分や赤ちゃんの存在や感情は「一旦切り離す」ことが求められていた。その背景には施設のシステムや医療者の雰囲気が大きく関係していた。 　今年度は諸般の事情により、情報収集が年度末となったため、分析途中である。今後成果発表に向けて分析を継続していく予定である。